

## 出エジプト記30章「祭司の執り成し」

### 1A 香壇 — 祈りの場 1-10

### 2A 登録 — 主の贖いの保証 11-16

### 3A 洗盤 — 御言葉による洗い 17-21

### 4A 最上の香 — 御心 22-38

#### 1B 香油 御心にかなう聖霊 22-33

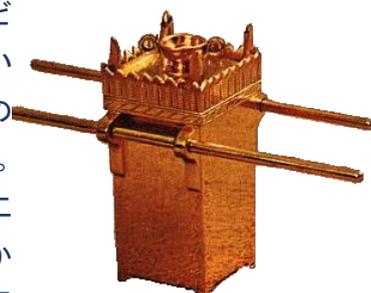
#### 2B 聖なる香 34-38

## 本文

私たちの学びは出エジプト記 30 章に入ります。前回と前々回で、祭司の装束と任職式を見ました。30 章は、祭司の務めに関わる祭具について見ていきます。

### 1A 香壇 — 祈りの場 1-10

1 また、香をたくための祭壇を作れ。それをアカシヤ材で作る。2 長さ一キュビト、幅一キュビトの正方形で、その高さは二キュビトとする。祭壇から角が出ているようにする。3 祭壇の上面と、側面すべて、および角には純金をかぶせ、その周りには金の飾り縁を作る。4 また、その祭壇のために二つの金の環を作る。その飾り縁の下の両側に、相対するように作る。これは祭壇を担ぐ棒を通すところとする。5 その棒はアカシヤ材で作り、それに金をかぶせる。6 それを、あかしの箱をさえぎる垂れ幕の手前、わたしがあなたと会う、あかしの箱の上の『宥めの蓋』の手前に置く。



香壇の作り方です。香壇はその名のとおりに、動物のいけにえを捧げる祭壇とは異なり、香をたくための壇です。大きさは、一キュビトずつの正方形、そして高さはその二倍です。臨在のパンのための机は、高さが一キュビトで、長さが二キュビト、幅が一キュビトで、ちょうど香壇を横にした形になります。そして契約の箱や供えのパンの机と同じように、アカシヤ材で作り、純金で覆います。環に棒を通して、運搬の時に担いで運ぶのも同じです。

祭壇と同じように角を四隅につけます。角は権威や力を現しますね。雄牛がやって来て、勇ましく敵に戦う姿を連想すると良いでしょう。救いに強い神を思い出します。そして、飾り縁をつけます。これも臨在のパンと同じです。これはあたかも、王冠をかぶっているかのようです。金で覆われていますから、主イエスを指し示しています。主は、王なる方であり、十字架に付けられる時は茨の冠でしたが、再臨される時は多くの王冠を頭にかぶって来られます。

そしてその配置ですが 6 節を見てください、「それを、あかしの箱をさえぎる垂れ幕の手前、わたしがあなたと会う、あかしの箱の上の『宥めの蓋』の手前に置く。」とあります。聖所と至聖所を仕切る垂れ幕の手前ですから、実際上は聖所に置きます。けれども、それは垂れ幕の向こうにある贖いの蓋のところに香が届くということを意識して、置いています。しかも、「わたしがあなたと会う、あかしの箱」とあり、主ご自身と会うところに立ち上る煙ということが意識されています。

7 アロンはその上で香りの高い香をたく。朝ごとにともしびを整え、煙を立ち上らせる。8 アロンは夕暮れにともしびをともしるときにも、煙を立ち上らせる。これは、あなたがたの代々にわたる、【主】の前の常供の香のささげ物である。9 あなたがたはその上で、異なった香や全焼のささげ物や穀物のささげ物を献げてはならない。また、その上に、注ぎのぶどう酒を注いではならない。10 アロンは年に一度、その角の上で宥めを行う。その祭壇のために、罪のきよめのささげ物の、宥めのための血によって、彼は代々にわたり、年に一度、宥めを行う。これは【主】にとって最も聖なるものである。」

大祭司アロンが、この上で朝ごとに、夕ごとに煙を立ち上がらせませす。これは、「常供」とあるように日毎のということであり、絶えず立ち上っているようにします。燭台も灯皿に油を入れ、いつも光がともっているようにしますが、香壇の煙も同じです。そして気を付けなければいけないのは、ここは外庭の青銅の祭壇とは違うということです。火によるいけにえは捧げません。ただし、レビ記 16 章や 23 章に出て来る贖罪日において、大祭司が罪のためのいけにえの血を、至聖所にまで携えに行きます。その時に、香壇の四隅の角に、青銅の祭壇の時と同じように血を塗ります。

このように大祭司が日毎に、主が会ってくださる贖いの蓋の上のところに香が届くようにする奉仕というのは、他の聖書箇所を読みますと「祈り」を表すことが分かっています。この香壇は何のためにあるのでしょうか。詩篇には、「141:2 私の祈りが御前への香として手を上げる祈りがタベのささげ物として立ち上りますように。」とあります。ルカによる福音書 1 章には、祭司ゼカリヤが香をたいている間に、御使いガブリエルが香壇の右に立ち、こう言いました。「1:13 恐れることはありません、ゼカリヤ。あなたの願いが聞き入れられたのです。」とありました。そして黙示録にて、天において香がたかかっている情景があります。「5:8 巻物を受け取ったとき、四つの生き物と二十四人の長老たちは子羊の前にひれ伏した。彼らはそれぞれ、豎琴と、香に満ちた金の鉢を持っていた。香は聖徒たちの祈りであった。」とあります。

私たちは前回学びましたね、イエス・キリストは大祭司であられる方で、私たちのために執り成しをしてくださる方です。香壇はアカシヤ材と純金で出来ていますが、アカシヤの木は人としてのイエス様を表しています。イエス様は地上におられた時に、父なる神への祈りを絶やすことはありませんでした。ルカによる福音書は、人間としてのイエス様の姿をよく見ることができると言われますが、祈られている姿をたくさん見るができます。例えば、「5:16 だが、イエスご自身は寂しいと

ころに退いて祈っておられた。」「6:12 そのころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。」とあります。そして有名なのが、ゲッセマネの園における祈りです。「22:42 父よ、みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの願いではなく、みこころがなりますように。」イエス様は、祈りが父なる神の御座に香の煙のように届いていることをよく知っておられたのです。そしてゲッセマネの園において、ご自身が血を流し、神に見捨てられた者とまでなることを、甘受されました。これは大祭司が血を香壇の角にぬり、それから煙を携えて至聖所に入ることであります。

ですから、私たちは祈ります。神の御座のところまで出て行って、祈ります。「ヘブ 4:16 ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」主がご自身の血によって聖めてくださった御座です。

## **2A 登録 — 主の贖いの保証 11-16**

11 【主】はモーセに告げられた。12 「あなたがイスラエルの子らの登録のためにその頭数を調べるとき、各人はその登録にあたり、自分のたましいの償い金を【主】に納めなければならない。これは、彼らの登録にあたり、彼らにわざわいが起こらないようにするためである。

「頭数を調べる」、すなわち人口調査を行ないます。これは実際、民数記において二十歳以上の成年男子が登録されます。それは軍務につくことのできる者たちです。そして彼らは償い金、あるいは身代金という言葉を使って良いでしょう、彼らが主に属する者となるために必要なお金です。自分たちは元々、エジプトから連れ出された救われた民です。その贖いに対して、自分自身が償い金を支払うことによって応答するのです。自分は礼拝する民なのだということを明らかにします。

人口調査とは、その調査を命じる者がその民を所有していることを表しています。聖書の中で人口調査をして罰せられた人がいます。ダビデです。部下の將軍ヨアブにそれをするように指示しましたが、ヨアブは「なぜそのようなことをするのですか？」と疑問を呈しました。けれどもダビデが説き伏せたので彼はいやいや行いました。そして、ダビデは心に痛みを覚えます。罪を犯した、と神に告白しました。イスラエルの民は神のものであるにも関わらず、自分の所有にしようと貪ったからです。

イエス様は、「マルコ 10:45 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」と言われました。この「贖いの代価」も身代金のことです。つまり、主が罪に売り渡されている私たちを、ご自分の命という身代金を支払うことによって、ご自分のものとすることを意味します。同じように、イスラエルの成年男子は、自動的に主に属する兵士となるのではなく、個々人が神の贖いを体験しなければいけない、ということです。私たちも教会に来れば自動的に教会員になるのではなく、神の贖いを個人的に受

け入れる必要があります。

13 登録される者がそれぞれ納めるのは、これである。聖所のシェケルで半シェケル。一シェケルは二十ゲラで、半シェケルが【主】への奉納物である。14 二十歳またそれ以上の者で、登録される者はみな、【主】にこの奉納物を納める。15 あなたがたのたましいのために宥めを行おうと、【主】に奉納物を納めるときには、富む人も半シェケルより多く払ってはならず、貧しい人もそれより少なく払ってはならない。16 イスラエルの子らから償いのための銀を受け取ったなら、それを会見の天幕の用に充てる。こうしてそれは、イスラエルの子らにとって、あなたがたのたましいに宥めがなされたことに対する、【主】の前での記念となる。」

シェケルは重量 11.4 グラムを表しますが、同時に、貨幣の価値を表していました。そして、これは富んだ人にも貧しい人にも一定の額が無差別に適用されます。それは、「すべての人が、同じように永遠のいのちを受ける」という霊的眞実が背後にあるからです。すべての人が罪人であり、全ての人々がキリストにある贖いを信仰によって受け入れることができ、そこには差別がありません。しばしば、過去の家庭環境などを取り上げて、「この人はこうなっているのだ」という話を聞きます。けれども、もしそれが正しいとすると、悪い家庭環境にいた人は罪の力から解放されず、良い家庭環境だったからこそ神との関係を結ぶことができる、という階級と差別ができてしまいます。いいえ違います、どんな環境であろうとも、主イエスが与えてくださる自由はそのくびきを打ち砕く力を持っているのです。

会見の天幕には、銀は、聖所の板の台座や外庭の掛け幕の鉤などに用いられます。そして、「イスラエルの子らにとって、あなたがたのたましいに宥めがなされたことに対する、【主】の前での記念となる。」とあります。主は、一人一人のイスラエル人を記憶してくださる、ということです。私たちが、キリストの贖いのゆえに神が私たちが忘れることは決してありません。

### 3A 洗盤 — 御言葉による洗い 17-21

17 【主】はまた、モーセに告げられた。18 「洗いのために洗盤とその台を青銅で作し、それを会見の天幕と祭壇の間に置き、その中に水を入れよ。19 アロンとその子らは、そこで手と足を洗う。20 彼らが会見の天幕に入るときには水を浴びる。彼らが死ぬことのないようにするためである。また、彼らが、【主】への食物のささげ物を焼いて煙にする務めのために祭壇に近づくときにも、21 その手、その足を洗う。彼らが死ぬことのないようにするためである。これは、彼とその子孫にとって代々にわたる永遠の掟である。」



出 30:18

青銅の洗盤

כִּיּוֹר נְחֹשֶׁת

青銅の台

כְּנוֹחַשֵׁת

洗盤は、外庭に置きます。青銅の祭壇と聖所の間に置きます。そして祭司が聖所の中に入る時

も、また青銅の祭壇でいけにえを捧げる時も、ここで手足を洗うことによって彼らは死を免れます。そして、洗盤も祭壇と同じように青銅で作られます。

私たちは前回、祭司の任職式の中で、装束を身に付ける前に彼らが水洗いを受けたのを思い出してください。その時にヨハネ 13 章にある、イエス様が弟子たちの足を洗われた話をしました。水洗いは、その人の罪が洗い清められることであることを話しました。興味深いことに、イエス様はその時ペテロに対して、「13:10 イエスは彼に言われた。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身がきよいのです。あなたがたはきよいのですが、皆がきよいわけではありません。」と言われました。ペテロや弟子たちは、イスカリオテのユダを除いて全身水浴をしたとイエス様は言われます。同じように祭司はこの務めを行なうにあたって全身水浴を受けるのですが、御霊によって私たちは洗われた、ということです。

けれども、足は洗う必要があります。当時はサンダルを履いていましたから、帰宅すれば足が埃で汚くなっているのは当たり前でした。それで足洗いをしました。同じように、私たちは御霊の洗いを受けても、日頃の生活の中で世の汚れを持ち運んでしまうことがあるのです。祭司も務めを行なっていく中で手足が汚れるのでそれを清めるのと同じように、私たちも日々の清めを必要とします。

イエス様は弟子たちに対して、「ヨハ 15:3 あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことによって、すでにきよいのです。」と言われました。そして使徒パウロは、「エペ 5:26 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、」と言いました。神の御言葉が私たちを清めるのです。しばしば言われることですが、「聖書は私たちを罪から引き離し、罪は私たちを聖書から引き離す。」と言います。罪の生活をすると聖書を読めなくなってしまうが、聖書を読んでいると罪の生活を捨てたくなる、ということです。詩篇にはこうあります。「119:9 どのようにして若い人は自分の道を清く保つことができるでしょうか。あなたのみことばのおりに道を守ることです。」

#### **4A 最上の香 — 御心 22-38**

そして次に、香についての教えがあります。

#### **1B 香油 御心にかなう聖霊 22-33**

22 【主】はモーセにこう告げられた。23 「あなたは最上の香料を取れ。液体の没薬を五百シェケル、香りの良いシナモンをその半分の二百五十シェケル、香りの良い菖蒲を二百五十シェケル、24 桂枝を聖所のシェケルで五百シェケル、オリーブ油を一ヒン。25 あなたは調香の技法を凝らしてこれらを調合し、聖なる注ぎの油を作る。これが聖なる注ぎの油となる。

聖所で使う香油の調合法です。ここでの大事な言葉は「最上」です。主ご自身を示す香りになり

ます。「没薬」は紅海周辺で取れる食物で、中国の漢方としても使われています。「ミルラ」とも呼ばれますが、エジプトの「ミイラ」を語源としていて、死体の埋葬にも使われます。事実、イエス様が死なれた後、弟子たちや女たちが香油と香料を用意しました。そして、シナモンです。「香りの良い菖蒲」は「カシア」と言って、シナモンよりも刺激のあるにおいのする木の樹皮です。これらをオリーブ油で混ぜ合わせ、聖なる注ぎの油とします。

26 そして、次のものに油注ぎを行う。会見の天幕、あかしの箱、27 机とそのすべての備品、燭台とそのすべての器具、香の祭壇、28 全焼のささげ物の祭壇とそのすべての用具、洗盤とその台。29 こうして、これらを聖別するなら、それは最も聖なるものとなる。これらに触れるものはすべて、聖なるものとなる。30 あなたはアロンとその子らに油注ぎを行い、彼らを聖別して、祭司としてわたしに仕えさせなければならない。

とにかく、あらゆる祭具に香油を注ぎます。祭具のみならず、祭司たちにも香油を注ぎます。これによってそれらがすべて聖なるものとなるからです。

私たちは、御霊の働きが水として形容され、そして油としても形容されていることを学びました。燭台のともしび皿における油が聖霊を差しており、聖霊に満たされるからこそ光を放つことができることを学びました。ここでも同じです。すべての礼拝奉仕において、聖霊の油注ぎがないものは存在しないということです。パウロはコリント人への手紙第一において、「3:16 あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか。」と言いました。私たちが神に礼拝を捧げる時に、私たちの心も思いも、そして私たちの力もすべてが聖霊の影響下になければいけないことを教えています。私たちはしばしば、礼拝を形式的なものにします。けれども、聖霊の油があらゆる奉仕に注がれていなければならないのです。

31 あなたはイスラエルの子らに告げよ。これは、あなたがたの代々にわたり、わたしにとって聖なる注ぎの油となる。32 これを人のからだに注いではならない。また、この割合で、これと似たものを作ってはならない。これは聖なるものであり、あなたがたにとっても聖なるものでなければならない。33 すべて、これと似たものを調合する者、または、これをほかの人に付ける者は、だれでも自分の民から断ち切られる。」

油は、その地方の人々にとって、多様な使われ方をしていました。食べ物に使うだけでなく、体に塗ることもしました。けれども、聖所の油と同じようなものを作ってはならない、と主は言われます。ちょうど一万円札を偽造すれば大きな罪に問われるように、それだけこの香油は高価ということです。ご聖霊の働きは特別であり、これを模倣するような試みはいけないということです。そして、注ぐのは祭司のみであり、他の一般人には注いではいけません。したがって、教会の中で使われる「聖霊の働き」が、いかに独特であるかが分かります。聖霊は、聖なる神の御霊です。この方の

みによって私たちは新たに生まれ、この方の力によってようやく主に仕えることができます。その人たち以外のところで、聖霊の働きがあるわけがなく、

## 2B 聖なる香 34-38

34 【主】はモーセに言われた。「あなたは香料のナタフ香、シェヘレテ香、ヘルベナ香と純粋な乳香を取れ。これらは、それぞれ同じ量でなければならない。35 これをもって、調香の技法を凝らして調合された、塩気のある、きよい、聖なる香を作れ。36 また、その一部を打ち砕いて粉にし、その一部を、わたしがあなたと会う会見の天幕の中のあかしの箱の前に供える。これは、あなたがたにとって最も聖なるものである。

こちらの香は、香壇の上でたくためのもので、四種類の香が書かれています。四つの隅の角があり、同じ四の数字です。全てを網羅しているという意味合いがあります。そして、「あかしの箱の前に供える」とありますが、贖罪日の時にはそのまま携えていきます。この時に、「塩気のある、きよい、聖なる香を作れ」とありますが、塩が添加されるとなると、白い煙が出て来るためにするためでしょうか、あるいはほかの香の匂いを強める働きをするのでしょうか。そして、それが最も聖なるものとなるとあります。

37 その割合で作る香を自分たちのために作ってはならない。それはあなたにとって、【主】に対して聖なるものである。38 これと似たものを作って、これを嗅ぐ者は、自分の民の間から断ち切られる。」

先の香油の香と同じですね。聖霊の働きなのであり、他は真似はできないのですから、真似するものなら、断ち切られます。

こうやって、最上の香を主ご自身に捧げます。そして、これが祈りを示していました。何をもって、それほどまでの主が喜ばれるのでしょうか？主にとってかぐわしいことがとても大切です。それは、「神の御心にかなった祈り」ということでしょう。「Iヨハ5:14 何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださるということ、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。」黙示録5章で聖徒たちが祈る祈りが、天に立ち上るところがありますが、それはおそらく主の祈り、「御国を来たらせたまえ」というものだったでしょう。それで巻物が開かれて、災いが地上に降りました。こうやって、最上の香による香りが香壇でささげられているのは、そのように御心にかなう祈りを捧げていることですね。